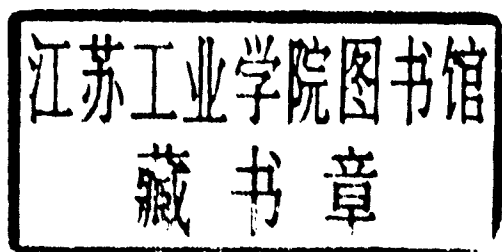


マラルメ全集 II

別冊 解題・註解



筑摩書房

マラルメ全集Ⅱ 別冊 解題・註解
発行所 筑摩書房

☆

1989年2月25日初版第1刷発行

凡例

一、『マラルメ全集』第二巻の構成

- (a) マラルメの主要散文作品を内容とする本巻の構成は、著作の発表、刊行に当ってマラルメ自身の意図した形態を尊重することを原則とした。
- (b) その原則にしたがって、散文形式による詩・評論をマラルメ自身が集成編集し、生前に刊行した最後の散文集たる『ディヴァガシオン』を、第一部に配置した。
- (c) 第二部は、『ディヴァガシオン』に収録されなかった散文作品によって構成される（一部分が同書に抜萃、収録されたものもある）。その排列は、各作品の主題を勘案した上、『ディヴァガシオン』編集に当ってマラルメが採用した部立ての順序に倣っている。
- (d) 『ディヴァガシオン』にその一部を抜萃、収録された作品について、『ヴィリエ・ド・リラダン』および『音楽と文芸』の二篇は、『ディヴァガシオン』との部分的重複を厭わず、単行本の形態をそのまま再現した。『ヴァテック』序文についても同様である。また、自選詩文集『詩と散文』所収の『ディヴァガシオンその二——祭式』は、マラルメ演劇論の主要な枠組を凝縮した唯一の論考であるので、これも第二部に収録した。
- (e) 「本文」と併読する便宜のため、「解題・註解」を別冊とした。ただし、原註は当該本文見開きの左小口に掲げられている。

二、翻訳の底本、その他

- (a) 第一部は『ディヴァガシオン』初版本を底本とし、第二部の諸篇もすべて初版本ないし一次資料から訳出した。また、単行本以前のいわゆるブレ・オリジナルのほとんどすべてを参照した。
- (b) マラルメの書名および作品の標題は多義的である。しかし、訳題の不統一が読者に混乱をあたえることを考慮し、原則としてこれを統一した。一方、翻訳本文・解題・註解に引用されたマラルメの文章については、あえて統一は図

らなかった。マラルメの文章がしばしばきわめて多義的であるため、同一原文が異なる訳文となることに編集委員としてはむしろ積極的な意義を認めたからである。

三、記号、その他

「」 単行本書名。

「」 「」 新聞・雑誌名、作品群総題、個別作品標題、原典における引用符。

「」 「」 美術作品題名。

「」 「」 原典本文で大文字で書き出された語。

「」 「」 訳文中、訳者により補われた辞句および割註。ただし後者には小活字が使用されている。

「」 「」 原典本文でイタリック字体により記された語句。

「」 「」 ゴチック字体

* 原註を表示。

散文のテキストにおいてもマラルメは活字配置の表現性を重視した。行間の空白のとりかたもその一環であり、翻訳に当っては原則として原典に対応させた。

なお、最終稿までの編集過程のきわめて複雑な作品（芝居鉛筆書き、「詩の危機」など）には、解題・註解の便宜を考慮して、原典にはない断章番号を付した。

四、第二巻に関係するマラルメ生前刊行の単行本、およびマラルメが寄稿した新聞・雑誌は左記の通りである。

(a) マラルメ生前刊行の単行本（刊行年代順）

『詩と散文とのアルバム』（一八八七） Stéphane Mallarmé: *Album de Vers et de Prose*.

『ヴィリエ・ド・リラダン』（一八九〇、一八九一） Stéphane Mallarmé: *Villiers de L'Isle-Adam*.

『バージュ』（一八九一） Stéphane Mallarmé: *Pages*.

『詩と散文』（一八九三） Stéphane Mallarmé: *Vers et Prose*.

『音楽と文芸』（一八九四） Stéphane Mallarmé : *La Musique et les Lettres*.
『ディヴァガシオン』（一八九七） Stéphane Mallarmé : *Divagations*.

【詩と散文】の初版・第二版ともに、本扉には「一八九三」と記されているが、初版本は一八九二年十一月末には刊行されている。
【音楽と文芸】初版本の本扉には「一八九五」と記されているが、遅くとも一八九四年十月には刊行されている。

(b) 新聞・雑誌（訳題の五十音順）

「ヴォーグ」 *La Vogue*.

「エクリ・ブール・ラール」 *Écrits pour l'Art*.

「オ・カルティエ・ラタン」 *Au Quartier Latin*.

「ガゼッタ・レッチェラーリヤ」

Gazzetta Letteraria | Artistica et Scientifica.

「キヤッセ・バンシー週報」

La Semaine de Casset et de Vichy.

「芸術家」 *L'Artiste*.

「芸術と流行」 *L'Art et la Mode*.

「コメディ＝フランセーズ」 *La Comédie Française*.

「今日評論」 *Revue d'aujourd'hui*.

「シャ・ノワール」 *Le Chat noir*.

「自由芸術」 *L'Art libre*.

「ジュルナル」 *Le Journal*.

「新世界評論」

La Revue du Monde nouveau | Littéraire, Artistique &

scientifique.

「スカピン」 *Le Scapin*.

「政治・文学談話」 *Entretiens politiques & littéraires*.

「青年ヘルギー」 *La Jeune Belgique*.

「チャップ・ブット」 *The Chap Book*.

「デカダンス芸文」 *La Décadence artistique et littéraire*.

「デカダン文芸」 *Le Décadent littéraire & artistique*.

「独立評論」 *La Revue Indépendante*.

「ナショナル・オブザーバー」 *The National Observer*.

「フィガロ」 *Le Figaro*.

「フランス＝アメリカ評論」 *La Revue Franco-Américaine*.

「ブリューム」 *La Plume*.

「文学・芸術復興」 *La Renaissance littéraire et artistique*.

「文芸共和国」 *La République des Lettres*.

「文芸・芸術評論」 *La Revue des Lettres et des Arts*.

「メルキュール・ド・フランス」 *Le Mercure de France*.

「ルヴェ・アンシクロペディック」

La Revue encyclopédique.

「ルヴェ・ブランシタ」 *La Revue blanche*.

「ルヴェ・ローズ」 *La Revue rose*.

「レヴェイエ」 *Le Réveil*.

「ワグナー評論」 *La Revue wagnérienne*.

五、第二巻に關係するマラルメ著作の現行主要刊本

- (a) 『マラルメ全集』（アンリ・モンドール、G・ジャン・オーブリー編、ブレイアード叢書、ガリマール書店、一九四五年初版）。「解題・註解」では「ブレイアード版『全集』」と略記。

Stéphane Mallarmé : *Œuvres complètes*, texte établi et annoté par Henri Mondor et G. Jean-Aubry. Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1945.

唯一の現行『全集』であるが、テキストおよび巻末ノートに疎漏がすくなくらず見出される。

- (b) ステファヌ・マラルメ『イジチュール、デイヴァガシオン、アン・クー・ド・デ』（イヴ・ボンヌフォワ校訂、ボエジー叢書、ガリマール書店、一九七六年）。「解題・註解」では「ボエジー叢書版」と略記。

Stéphane Mallarmé : *Igitur, Divagations, Un coup de dés*, préface d'Yves Bonnefoy, collection Poésie, Gallimard, 1976.

廉価流布版だが、特にテキスト校訂の点で現在入手しうる最良の刊本。

- (c) 『マラルメ著作集』（イヴ・アラン・フーヴル編、クラシック・ガルニエ叢書、ガルニエ社、一九八五年）。

Stéphane Mallarmé : *Œuvres*, texte établi et annoté par Yves-Alain Favre, Classiques Garnier, Garnier, 1985.

別冊 目次

微かな記憶——25

小屋掛芝居長広舌——27

白い睡蓮——28

聖職者——30

栄光——31

葛藤——32

凡例

I

ディヴァガシオン 3

「はしがき」 10

逸話、或いは詩篇 16

未来の現象——17

秋の歎き——18

冬のおののき——20

類推の魔——21

哀れな蒼白い少年——22

パイプ——23

見世物中断——24

鍾愛の書 36

かつて、一冊のボードレルの余白に——36

『ヴァテック』要約のための断章——37

小さな円形肖像と全身像いくつか 38

ヴィリエ・ド・リラダン——40

ヴェルレーヌ——47

アルチュール・ランボ——47

ローラン・タイヤード——48

ベックフォード——48

テニソン—対岸より見たる—49

テオドール・ド・パンヴィル—50

エドガー・ポー—50

ホイスラー—51

エドゥアール・マネ—51

ペルト・モリゾ—51

リヒャルト・ワーグナー—53

—フランス詩人の夢想

芝居鉛筆書き—63

芝居鉛筆書き—64

ハムレット—77

バレエ—85

もうひとつの舞踏論 バレエにおける背景—94

最近の実例に基づいて

〔唯一人、滑らかに、魔術師の如く…〕—101

默劇—103

風俗劇、あるいは近代作家たち—110

挿入句—137

舞台と紙集—146

祝祭—158

詩の危機—173

書物はいえ 190

限定された行動—190

陳列—192

書物、精神の楽器—193

文芸の中にある神秘—196

聖務・典礼—199

聖なる楽しみ—200

カトリシズム—203

同題—215

重大雑報 220

金——224

糾弾——228

禁城——228

魔術——228

牧歌——232

孤独——233

対決——234

宮廷——235

擁護救済——237

書誌 239

II

文学的交響曲——247

『ヴァテック』序文——248

ヴィリエ・ド・リラダン——252

マラルメ訳『エドガー・ポー詩集』

〔訳者による〕評釈——289

弔〔モーパッサン追悼〕——302

ディヴァガシオンその二 祭式——303

『マクベス』における魔女たちの

質の登場——306

ルネ・ギル著『語論』のための緒言——309

音楽と文芸——316

マ
ラ
ル
メ
全
集
II
別
冊
解
題
・
註
解

ステイヴァガシオン

STÉPHANE MALLARMÉ | — | DIVAGATIONS | — | PARIS | BIBLIOTHÈQUE-CHARPENTIER | EUGÈNE
FASQUELLE, ÉDITEUR | 11, RUE DE GRENELLE, 11 | 1897.

マラルメ散文作品の集大成である本書の表題『ディヴァガシオン』の意味そのものについては、マラルメ自身の筆になる無題の「はしがき」が、言うまでもなく過不足のない最上の解題たり得ているので、表題の説明は次項「はしがき」の解説に譲ることとし、ここでは、マラルメの散文作品がどのように執筆され発表されて行ったか、その跡を概観しておきたい。

(一)「逸話、或いは詩篇」の総題のもとに、本書の巻頭を占める散文詩群は、その発表年代が概ね一八六〇年代半ばおよび（七〇年代半ばに発表された二篇を例外として他は孰れも）一八八五年以降と、前後二つの発表時期に集中し乍らも、作者の若年時から晩年に亘っているが、その作品発表の事情については後出の当該事項の解説で詳しく触れることにする。但し、所謂後期散文詩の魁である「白い睡蓮」（一八八五年八月初出）がマラルメ後期散文の文章構成法の確立時期に関して甚だ示唆的であることはここで指摘しておかねばならない。

(二)一八七〇年代に入ってマラルメは、集中的にエドガー・ポーの詩を独特の律動を持つ散文訳で逐次公にしているが、七〇年代半ば、個人雑誌「最新流行」（一八七四年九月六日—十二月二十日、第八号まで）を自ら編集発行し、友人たちの寄稿も仰ぐ傍ら、様々なペン・ネームの仮面のもとに、化粧・装身具・家具・劇評・料理記事に到るまで、自ら饒舌なまでに縦横の才筆を揮っているということ、次に、ポー『大鴉』の豪華な仏訳本刊行を機に、英国詩壇に多くの知友を得、その結果ロンドンの著名な週刊誌「アシニアム」の「文壇・劇壇・画壇・楽壇消息」欄を担当していた英詩人オショーネシーのためにフランスの文学・演劇・美術に関する消息を伝え、七五年十一月六日号掲載分以降、七六年四月二十九日号掲載分を除いて十二月二十三日号に到る間、オショーネシーの紹介文の黒子役を務めたこと、特に自らも仏本国およびロンドンでマネ擁護の論陣を張り、新しい絵画の擡頭に關して時代に先んじた炯眼のほどを遺憾なく發揮したということが注目される

が、これ亦その詳細な事情はそれぞれ当該項目の担当者の解説に俟つべきであらう。孰れにせよ、ここには、移ろい易い「流行」という「現代都市生活のミューズ」の影を近未来への視覚に裏打ちされた文章の力で捉えようと愉しみ努め、或いは、言葉の「新たな義務」を把握し得た者の目を絵画の世界に注いで友愛のメッセージを贈るマラルメの姿がある。詩を擁護すべくマラルメを駆り立てた敵手、——一八八五年以降の彼の批評活動を方向づけたと言つても過言ではないライヴアルは、この時期にあつてはまだ姿をあらわにはしていなかった。

(三) マラルメに、初めて身に迫る危機感を覚えながら評論の筆を執らせたのは、他でもなく音楽家リヒャルト・ワーグナーの存在であつた。尤も彼の身辺にも、カチュール・マンデスやヴィリエ・ド・リラダンのように夙にワーグナーに傾倒し、バイロイト詣でをした友人がいたし、その舞台を自身で見たことはなかったとしても、異常な力の漲るその音楽にはマラルメ自身、バリに再び定住してのち接していたに相違なく(例えば日曜コンサート¹の形で)、それは親友たちの見聞談と相俟つて、「かの地」での民衆的祝祭への夢想を彼の裡に育んだであらう。——演劇と交響楽との合体、但し、一ゲルマン民族の既成神話をその儘鵜呑みにした胃袋の鈍感さが氣になつてならぬ。——礼讃と批判とが緬い交ぜになつたマラルメのこのワーグナー観が須臾の間に確立したとは考えられぬが、少なくともこれに表現を与えるべく迫つたのが雑誌「ワーグナー評論」主筆エドゥアール・デュジャルダンの熱心な執筆依頼であつた。この懇請に應えてマラルメが寄稿した「リヒャルト・ワーグナー——フランス詩人の夢想」(一八八五年八月)は、バリでの若いワーグナー心酔者の拠点であつたこの雑誌の中にこれを置いて眺めると、ひと際異彩を放つことになるのだが、マラルメ自身が詩の在り処を問い詰めて、詩的言語の在りよう如何ということに思念を凝らす過程で、雑音から隔離された楽音というものに自らの存続の全てを委ね得る音楽への嫉妬とは言わぬまでも激しい対抗心を掻き立てられることがなかつたならば、ワーグナーの野放図な「無神経さ」にマラルメが苛立つこともなかつたであらう。しかし事実上、ワーグナーの提示した「楽劇」がマラルメの目には「詩に対する交響楽の挑戦」と映つた、という点に、この遭遇の持つマラルメにとって運命的とでも言うしかない退^レ引きならぬ衝撃性が認められるのであつて、以後マラルメの思索は、詩句についての更なる探究と舞台芸術全般の見直しによる未来の全体芸術への手掛り構築との両面が互いに他に光を投げかけ合うという形で推し進められることになるのである。マラルメの活発な批評活動が劇評から開始されたことも、音楽と詩句乃至演劇とを強引に繋いでみせたこのドイツ人音楽家に向つて「詩的であるフランス精神」が示すべき対案を模索しつつあるのだとこれを観ずるならば、何びとにも十分に納得のいくことである。逆に言えば、一八八六年十一月から翌年七月までマラルメが異常なまでの迅速さと集中力とを発揮しつつ劇評「演劇につい

ての覚え書」を第三次「独立評論」(主筆デュジャルダン、編集主任フェリックス・フェネオン、第四号以降アジャルベール、のちにはギュスターヴ・カーンも編集に参加。)の発足と同時に同誌に連載し続けたという事実は、ワーグナー衝擊(当の音楽家は一八八三年ヴェネチアに客死したのだが)を抜きにしては説明し難いことであろう。この連載に先立ち、「ワーグナー論」を発表した三カ月後の一八八五年十一月十六日付ヴェルレーヌ宛手紙(所謂「自叙伝」)の中で、パレエの上演やオルガン演奏会に頻繁に顔を出す自身の熱中ぶりを語って「その意味はいずれ明らかとなるう」とわざわざ述べていることから、ワーグナーへの具体的な対案提示の努力が既に始められていたことを窺うことができる。ともあれ、マラルメの本格的な「散文時代」はこのように舞台芸術論の展開によって開幕した。そして、この時期、連載の一環としてテオドー・ド・バンヴィルの韻文劇を論じて「詩句の一原理」を省察することはあっても、詩を正面切って考察した文章といえ、僅かに一篇、詩的言語の本質を闡明した「ルネ・ギル著『語論』のための緒言」(一八八六年八月)があるだけなのである。「詩句の一原理」にせよ、当時の自国の演劇状況に失望せざるを得なかったマラルメが、ワーグナーへの対案の手掛りの一つとして辛うじて見出し得た未来における「複数の声による頌歌」実現への翹望の表明に他ならず、果然この論考も含めてマラルメ初の散文集『バージュ』(一八九一)の中核をなすのは、「芝居鉛筆書き」の総題のもとに、「演劇についての覚え書」を再編構成し直した舞台芸術論なのである。勿論、近作四篇も含めて旧来の散文詩群を配列した本書前半部の末尾には、上述の詩的言語論が「ディヴァガシオン」と改題されて(——マラルメの作品にこの語が現われるのはこのときが最初である——)、いずれはこれと共に単行本『ディヴァガシオン』の一環となるべき「鍾愛の書」グループ中の一篇「ヴァテック」要約のための断章」と顔を並べてはいるが、舞台芸術論に後統して本書の掉尾を飾る作品が、他でもなく「ワーグナー論」であることから見ても、本書を編集した著者の意図が奈辺にあつたかは、何びとの目にも明らかであろう。単行本『バージュ』はマラルメの「散文時代」第一期の総括であり、中核部はワーグナーの色濃い影の下に置かれていた。

四 『バージュ』刊行の翌年から二カ年の間、マラルメに散文作品発表の場を提供したのはロンドンの新聞「ナショナル・オブザーヴァー」紙であった。マラルメの親友である画家ホイイスラーの仲介で、自身詩人でもあった同紙の主筆ウィリアム・アーネスト・ヘンリーが掲載を決断したのである。こうして、一八九二年三月二十六日から翌九三年七月二十二日まで、マラルメは前後十一回に亘って論考・記事をフランス語の儘同紙に発表することになるのだが、若干の読者から抗議が寄せられたにも拘らず、この企画が続行されたのはヘンリーの勇断による。マラルメが寄稿した論考の中、最も重要なもののみを挙げれば、第一にはマラルメ詩論初の礎石となった「フランスにおける詩と音楽」(九二年三月二十六日号)、第二に

は民衆が共時的に享受すべき全体芸術の雛形の一つとして教会でのオルガン演奏会とカトリック典礼とを美学的に考察した『祝祭』(九二年五月七日号、のち単行本『ディヴァガシオン』で「カトリシズム」の次に配列されて「同題」(「統・カトリシズム」と改題。同書所収の「祝祭」とは別物。)、この両者がそれぞれ、著者自選詩文集『詩と散文』(一八九三——邦訳、筑摩叢書三一一)の巻末に置かれた『ディヴァガシオン』その一——詩句に關して「および『ディヴァガシオン』その二——祭式」のベースとなり、ここに詩論と舞台芸術論とがマラルメ美学の両輪として美しい均衡を示すのである。なお第三に、『詩と散文』には収められなかったが、九二年六月十一日号に掲載された「陳列」を忘れてはなるまい。書店の倒産という社会事象から、社会における文学存在を体现するものとして「書物」を思索の基本レヴェルとした、マラルメが最後に行き着くべき「書物論」への道を開いたこれ亦重要な論考である。更に、翌九三年には「魔法」(一月二十八日号)、「雑報」(二月二十五日号、最終的には「金」と改題。)、^{ソレミテ}「パレエとロイ・フラ嬢についての考察」(五月十三日号)、『ディヴァガシオン』所収「もう一つの舞踏論」の前身)、「演劇」(六月十日号、七月一日号、のちに「舞台と紙葉」と改題。)など、『ディヴァガシオン』(一八九七)に収められるべき論考群が孰れもこのロンドンの新聞を初出としている。九三年に入って仏本国での重要な散文作品の発表が、「ジュルナル」紙日曜版(十二月五日号)に掲載された「聖なる楽しみ」一篇にとどまるのは著しく対照的であると言ってよい。

(四) 翌一八九四年、発表の場は又しても英国であるが、この度はロンドンの新聞雑誌ではなく、オックスフォード、ケンブリッジ両大学で行われた講演である(三月一日オックスフォード、翌二日ケンブリッジ、演題は全く同一)。「音楽と文芸」と題されたこの講演は、翌月には「ルヴュ・ブランシュ」誌に掲載され、更に同年十月、単行本となるのだが、散文集『ディヴァガシオン』読解のための、これは多分最良のマニュアルである、と言い得る。無論マラルメの語り口は典雅さ輕妙さを失することはなく、伸びやかに話を展開させて行くけれども、この時点での彼の思索の主要な柱を語り忘れることはないのである。内容の詳細はこれ亦本文そのものおよび当該項目担当者の解説に委ねねばならぬが、最も重要な点だけに限ってひと言触れておくと、これまで現実の詩と現実の音楽とを対立的にとらえて、フランス詩の新しい趨勢を専ら「音楽からの富の奪還」であるとして来たマラルメの認識が、ここで根本的に反省されて、「文芸」と「音楽」とが対等に並び立つ原理として把握し直され、交響案にせよ楽劇にせよ、又、現実の詩篇にせよ、孰れもこの二つの表現原理——闇と光によつて既に共有されてあることにおいて、それぞれ存在し得ている、とされているのである。そしてマラルメの思索がここに到達したことが九三年の一応の自己総括を再び流動化させ、来たるべき『ディヴァガシオン』に向けての運動もここから生

起することになる。換言すれば、この意味では何よりもマラルメ自身の内発的な要請として、このとき既に予定されていた限られた読者を対象とする『詩集』再刊の努力と並行して、こちらの方は逆に出来得る限り多くの人々に読まれることを念願しての『散文集』再編、——この実現に向けて、『詩と散文』の「いくばくかのページ」は発展的に解消されるのである。しかし、この運動生起の原因として、九四年当時のフランスの詩壇に露呈し出した新たな動向があることも見落してはなるまい。現に「音楽と文芸」の中でもマラルメはマックス・ノルダウの売名的な有名人中傷行為を、珍しくその名をあからさまに挙げながら揶揄しているのだが、マラルメが、自身にずっと身近なところで自分に対する讒謗が起りつつあったことを知らなかった筈はない。マラルメがこうした自称後輩らの離反に対して示した表立った反応と言えば、九三年の「ディヴァガシオンその一」の中で名前を列挙して推輓した詩人たちのうち、この断章を九七年の「詩の危機」の中に組入れるに際して、ジャン・モレアスの名に「つい先頃までの」という限定をつけ加え、アドルフ・レッテの名を削除しただけのことであるが、マラルメの終始醒めていた目には軽薄な時代表層の流れの変化など、一顧するにも値しなかったであろう（尤も当時の文筆業界ではこの兩名は、現代のわれわれには想像できぬほどの大きな存在であったのだらうけれども）。ともあれ、事新しく指摘するまでもなく、文学史家ビエール・マルチノが夙に述べているように、「一八九四年にはマラルメに対する激しい攻撃が現われた」のである。即ち「詩人であり、かつては象徴派であったアドルフ・レッテが、数年間にわたって手きびしく、マラルメは『偉大な思想家でもなく、偉大な詩人でもない』と主張しつづけ、マラルメの影響力をいまわしいものと決めつけた。この聖像破壊者は『永久に無価値な偶像をやつた』といって称賛された。『半獣神の午後』の擁護者たちに向って、『マラルメ氏』が許しがたい大祭司となった文学は、要するにバベルの文学にはかならない」という主張が断固として対立した。一八九七年、象徴派の『ラ・ブリューム』誌に発表された一篇のパラードは、いやみたっぶりなルフランで『象徴主義は老いばれた』と歌った。……」（『高踏派と象徴主義』一九二五年、——引用は木内孝訳による。傍点松室。）

「現代のこの時期を、それに掛り合う必要のない詩人にとっては、一つの空位時代であると見做している」（ヴェルレーヌ宛手紙「自叙伝」）マラルメにとって、自らの身長に見合う偶像を勝手に作り上げ、これを自ら破壊しているに他ならぬレッテらの一人相撲は傍迷惑でもあり笑止の沙汰でもあったであらう。「講演」の中で名指しで揶揄されたノルダウは差詰め彼らの代表であったのかもしれないが、その反面、後進たちのこの無理解にはマラルメとしてもやはり遣り切れぬ思いを禁じ得なかったのではあるまいか。従つて、一八九五年のマラルメに見られるこの度も亦異常なまでに集中的な論考連載の動因